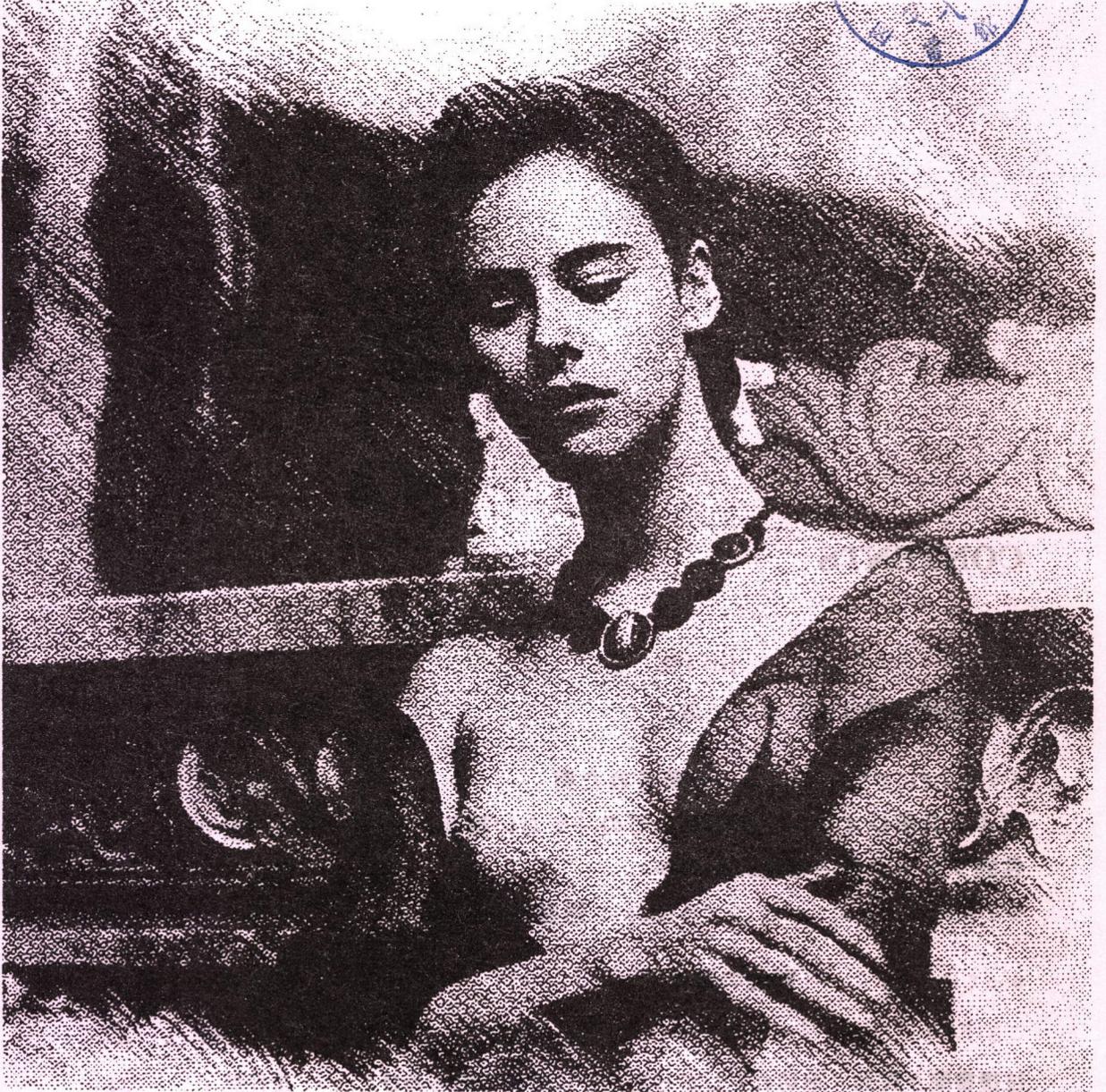


CHOISIR



VOL. 29

CHOISIR

29号 1993. JULY

CONTENTS

今月のストコドッコイ 「山口勉」という人	片山文恵	1
私の恋愛幻想はボロボロである	小口容子	2
少女マンガにダイエットを③ 去勢された男	佐藤雅樹	4
ゲイ・ステレオタイプ批判としての「やおい論争」	市川恵里	7
性的ファンタジーは誰のものか	高松久子	14
少女マンガにダイエットを《私設番外編》 強姦された女	真愉	16
かつてにシネマ 「野性の夜に」	柳田亮子	20
ごきげんナイト ホリー・コール・トリオの巻	色川奈緒	22
往復書簡が突如、途切れてしまったことについてのおわび	掛札悠子	24
編集後記		25



私の恋愛幻想はボロボロである

小口容子

最近、男を好きにならなくなった。以前はいい男を見ると、すぐにボーとして「何とかやれないだろうか」と考えたものである。結婚して、良い（セックス）パートナーと安定した関係を築き上げて、といった自立した女

のようなことを言えるといいのだが、どうも違う。夫は、「俺に女の愛人ができるのと、男と肉体関係ができるのと、どっちがいいか」と、フトンで寝ながら私に聞いたり、宴会で子ども（自分の）がいるのにゲイとキスして、私に心労が絶えない。こういうのをウラオモテのない良い夫と言うらしいが、あんまりなさすぎるのも考えものである。

夫はスキな人がいると心にしまっておけなくて、何かというとその人を話に出したり、あげくは「三人で一緒に飲もう」と言い出す始末で、そういうことは妻にはひた隠しにするものだと思っていた常識的な私は、はじめ驚いた。妻にまでしゃべらずにいられないほど好きで好きでたまらないのか、できれば頭の線がキレてしまったとしか思えないではないか。

しかし、最近わかってきたが、夫にはただ常識がないだけだったのである。女を見ると、本能的にと言うか反射的にと言うか、すぐ口説いてしまう野生的な人がよくいるが、夫はそういう人ではない。ただ、一対一の対幻想や、恋愛によって救われたり依存したりという観念がない、ことはないだろうが、希薄なのである（と思う）。だって、恋愛に過剰な期待をかけるのって、不幸な現代人の常識でしょうっ！ まさに一対一の、「絶対的な恋愛」（代替不可能な、これしかないっていう恋愛）の幻想によりかかって生きてきた私にとって、こういう常識の無さって、打撃的な

のであった。

しかし、私の恋愛に対する幻想をぶち壊してくれたのは、夫の非常識だけではなかった。先日、夫と夫の友人と私は子どもの四人で、楽しい時間を過ごそうと、わざわざ国立までかけていき、しゃれた飲屋の席に着くやいなや、私のことを二年前にボロゾーキンのように振ったオトコが私たちの前に現れ、「どうも、久しぶり」とかなんとか言ったのであった。しかも、夫に向かって、である。

以前の私なら、こういうワケのわからない状況にウツトリして、「なんて運命的な……」と思ったハズである。しかし私は、表面上は冷静を装いながらも、「国立まで来て、しゃれた飲屋に来て、なぜこんな目に？」「この恥知らず、早く死んでしまえっ」と絶句していた。

私は、二年前のドラマチックなフラレ方ゆえ、未だにこの男を「白馬の王子様」だと思っているし、恨んでいるし、恨んでいるということは未だに好きだということである。つまり、彼に対する幻想は健在である。しかし、幻想と生身の彼はもはや別々である。私に必要なのは、既に幻想としての彼だけで、「本物の彼」には「もうダメされないぞ」という思いしか湧かない。

二年前、この男は、女にとつての男を「暖炉」(やさしくてあたたかい)か「自己実現のため、女を振り捨てて自分の道を行く渡哲也」(「東京流れ者」)かの二種類に分ける暴論

で私を呆れさせたが、そういう二元論って要するに、女に依存する自分が女によって「一般的な」恋愛関係にはまるのを恐れているだけで、小心このうえない。ウーマン・ヘイティングのお手本のような奴である。

このように常に彼の暴論は暴論ゆえにかっこいいが、冷静に考えると、基盤は通俗的である。そして、そうした通俗的などころだとかを、表面上のわけのわからないカッコよさに関わらず(あれをカッコいいと思っているのはお前だけだ、と夫は言うだろうが)冷静に考えることができるようになった私は、今や「白馬の王子様」である彼の幻想を利用・再利用しているだけで、「本物の彼」のやっていることにドキドキもしない。トキメキがないのは寂しいが、やっと同じ土俵に立っているという気がする。私が泣寝入りするよいな女だと思ふなよ、と二年間思い続けていたことだって、幻想の再利用に過ぎなかったのだ。

一方、二年前、彼に「暖炉」と断定された私の夫だが、彼に「どうも、久しぶり」なんて言われてヘラヘラ笑いながら、「やあー」なんて言っていて、ヘンである。わたしが夫の立場なら、「なんちゅう挑発的な態度」「もしかして不義密通しているのでは」と、ムツとすと思う。そが、夫の心の寛いというか、鈍感というのかもしれないが、この、他人のことを気にしないところって、やっぱり非常識だと私は思う。



この原稿書くために、秋里和国「THE B・B・B（ばっくれ バークレー ボーイ）」全一〇巻を読み返した。いやー、改めて読み直してもスゴイ！ はらわた煮え練り変えるのを通り越して、クラクラしてしまった。女の子のファンタジーという毒気に、うんざりしてしま

った。
ストーリーを簡単に説明すると、主人公の「友実」は義兄の「獅子丸」に再会して恋をする。しかし、獅子丸は「刑部GUY」という意地悪なモデルの男と暮らしている。そして、GUYも実は獅子丸を愛している。最初はこのように、獅子丸をばさんで友実とGUYが火花を散らし合うが、そこに、獅子丸の両親の死にまつわる誘拐などさまざまな事件に巻き込まれ、そうこうするうちに、ゲイのはずのGUYも友実を愛するようになり、今度はGUYと友実が獅子丸を奪い合う。獅子丸自身の気持ちもはっきりせず、自分は友実を好きだと言いながらも、GUYによろめいてしまう。ラストは、この呆れた三人組が、獅子丸と友実、GUYと友実、GUYと獅子丸、という三つの結婚式を挙げ、三人で結婚し、三人

でベッドに眠り、三人で子どもを育てる。

ストーリーの、もはや「大胆」なんて生易しいもんじゃないほどの展開に加え、バークレー、アメフト、モデル、黒服、デイスコ、手入れ、誘拐、殺人、近親相姦、超能力……と、赤川次郎も真っ青な設定に、トドメのよう

うな、男二人と女一人の結婚だ。

獅子丸の優柔不断さとナルシズムにはイライラするし、友実の「これが女の子の本音なのよ、こうせずにはいられない気持ち、あなたならわかってくれるでしょう？」の傲慢なわがままぶりにも、「うっとうしい女！」と何度も舌打ちしてしまう。こういう思い込みの強い女って、たぶんゲイがいちばん嫌いなタイプなんじゃないかな？ それなのに、作者はGUYに「何十億という女の中では、君がいちばん好きだった」などという勘違いなセリフを堂々と吐かせて、彼女の行動をちゃっかり正当化してしまう。たいがいのゲイは、むしろウーマン・ヘイティングにちかいたいという現実を、少しは思い知ってほしいものだ。

それにしても、GUYの信じたいほどイージーな人物設定は、ほとんど非人間的な扱いだ。

GUYがゲイになった理由からしてそもそも、女から優しくされなかったからだ、という非常に安直なものだし、それが友実に優しくされて心を開いたら、それまでの超女嫌いをかなぐり捨てて、突然サカリがついたように友実を愛するなんて、彼のセクシャリティは、彼にとってのセックスは、いった何なんだろうかと

あーあ、結局、男が「ゲイに走る」のは、お母さんの愛情が足りなかったからなのね。「かわいいそんな子どもだったのね。「かわいいそう」でなくなったら、「普通」に戻るのね。

少女マンガにダイエットを③ 去勢された男

佐藤雅樹



友実：愛してる

女の子たちは、綺麗なリボンかけて、ゲイの男からのセリフをプレゼントしてもらうのが究極の夢なんだろうな。GUYの告白にうっとりしている友実の表情の裏に、女の子たちのキラキラひかる瞳の熱っぽい色が見えた気がして、背筋が寒いわ。

そりゃあ、自分だけが「彼の唯一の女」っていうのは美味しいファンタジーだろうけどね。「ゲイを改心させる」っていうのも、こたえらないんだろうな。なにしろ、ゲイだとわかって付き合った男が「私のこと少しも愛してくれない」なんて信じられない悩みごと相談の手紙が、ゲイのミニコミ誌なんか出していると届いちゃうくらいだから。女を愛さないから「ゲイ」のはずなんだけど、彼女はいったい何を期待していたんでしょね？

男の欲望は、けっして「女」のように抽象的ではない。つまり、男には「自分の性欲がわからない」というセクシャリティの保留や、「あたし、女の人にもちょっと関心があるわ」的「ちょっとレズ感覚」というのは、ほとんど見当たらない。男にとって、欲望とは一般的に「内から込み上げていく衝動的なもの」とされているし、常に社会的であることを期待される男へ押しつけられるマッショな強制異性愛の壁は非情なほど厚い。その壁に逆らってまでゲイであることを認めざるを得なかった男のセクシャリティは、ちょっとやそっと女に優しくされたぐらいで節操なく変わったりしない。いや、できない。

GUYにも獅子丸にも、「生身の男」という欲望の匂いはどこにもない。「男の衝動的な行為」を「らしく」描くことで、それなりに誤魔化すことはできても、彼らの「性」についてのリアリティはどこにも見当たらない。

ま、いいけど。ならば、お父さんの愛情が足りなかったり、性的なトラウマ抱えた女の子は、レズビアンに走るか、仕事を恋人にしたキャリアアウーマンになるんでしょう？　そして、「男らしい」王子様から「君はかわいそうだね」と言ってキスしてもらうか、「君はまだ、男の本当のよさを知らないだけだ。俺が教えてやる！」と強姦されてしまえば、「かわいく」なれるのね。たしかにレディコミなんか、この路線よね。まったく、好きにしてほしいわ！

——ほんとうにもう混乱に混乱をきたして

つきあってた男たちに会ったり　電話かけたりで

さよならをしまくった……

友実！　ぼくを助けてほしい

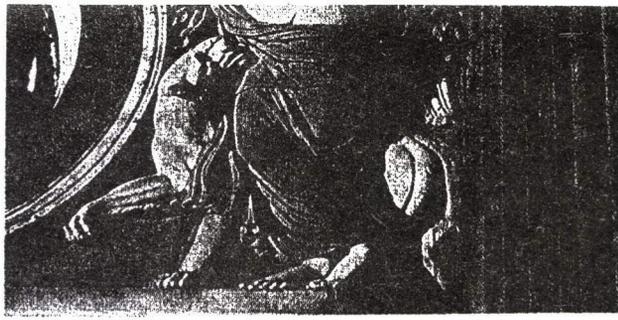
男もダメな体になっただうえ

きみにまで拒絶されたら　ぼくはこの先

ほかの女性を好きになることも

できなくなる気がする……

男もダメ　女もダメでは　ぼくの人生まっ暗だ！



あたかも「去勢」されてしまったかのようである。

「男」という「型」を演じてはいても、ここには「男の性」はどこにも存在しない。かといって、「女の性」も見えてこない。この世界にはびこるのは、性や恋愛をシミュレーションの遊びに変えてしまった「女の子の夢物語」だけである。「ゲイ」という存在は、その妄想のパートナーにとっても都合よく利用できるであろう。

ところで、同じ少女マンガでも、これが吉田秋生の作品になると、「男の子の性衝動」がともリアルに描かれている。なんとなく絵柄のシンプルさが似ているような気がして、ついつい秋里の作品も開いてしまうのだが、吉田のとても丁寧な人物描写に比べると、なんとも人物がご都合主義的で、設定のセンセーションナルさのみで視聴率を稼ごうとする安手のトレンドイ・ドラマのようだ。少女マンガなのだから、ある程度、少女(?)の視点に偏るのは仕方ないとしても、程度が過ぎると、男からベニスをもぎとるほどに人物が破綻してしまう。

流行作家にふさわしく(?)、秋里にはゲイを題材にした作品がいくつもあつた。「デッド・エンド」「眠れる森の美男」「TOMMOI」などだが、いずれも悲劇的に終わる。「TOMMOI」は「眠れる森」の続編にあたるが、エイズを題材に取り入れていて、その使い方の評価はとりあえずおいておき、二人の関係を知らず逆上した相手の妻に、エイズが発病しかけた恋人を射殺された主人公が悲観して、ほとんど死ぬためにアフガニスタンの医者として働き、そして命を落とすという、あまりにも悲惨な話だ。

— 神よ! もう… 死んでもいいですか

ああ きょうも 空が…青い

主人公友井の最後の言葉である。

男同士の関係が「報われないもの」という描かれ方は、異性愛を絶対的なものとした上での、同性愛への勝手なロマンである。

「THE B B B」ラストの三人の結婚にいたっては、「女の子のファンタジー、ここに極まり!」という気がして、とても不快だ。これを「多型倒錯」というなら、あまりにもお気楽である。

確かに、性にたいするさまざまな垣根を払ったら、セクシャリティは性別に縛られないほど自由なものになるのかもしれないが、そこまで人が解放されるのは並大抵のことではない。

それでも、そうした提起自体は大切なものである。こうしたテーマを扱った映画がいくつも思い浮かぶ。「彼女と彼たち」「途方に暮れる三人の夜」などである。これらの映画を観ていると、「性」や「対」などは、登場人物たちにとってそれほど重要なものではないらしい、と納得させられるほどに、彼らの「生活」やその裏の「孤独」が描写されている。そして、「関係とは何だろう?」という問いを観るものに突き付ける。

だが、こうした「関係」の重い部分やシビアな現実を棚上げにし、美味しいところだけの夢の安易に読者に提供するのは、もはやドラックを売るように犯罪的である。

この麻薬にはまってしまふのは、なにも、この男社会の中で「性」と向き合えない女の子だけではない。この強制異性愛社会の中で「ゲイであること」を受け入れられないゲイにとっても、社会や自分自身に対して世間体を取り繕うのに都合がいい。

「ゲイ・ステレオタイプ批判としての 「やおい論争」

市川恵里

私は子どもの時から高校生ごろまで、浴びるように少女まんがを読んできた。しかし、いわゆる狭義の「やおい」には興味も関心もないため(確かに大昔『JUNE』や『ALLAN』を買ったことはあるものの、つまらなくてすぐやめてしまった)、今回の「やおい論争」の経緯は興味深く見守りつつ、やおいでもオコゲでもない自分が口を出す筋合いのものではないような気がしていた。けれど「CHOISIR」二八号で佐藤さんの文章を読み、やっと落ち着いたというか、私なりの考えをまとめられそうな感じがするので、こうして書き始めている。

「やおい論争」と名付けられてしまったのが、そもそも間違いないんじゃないだろうか? 本当に問題になっているのは、「やおい」ですらないのではなからうか? もともと佐藤さんの意図が「やおい叩き」のみにあったのでは無論なく、本質的には現実の女性たち(とりわけオコゲなど)の持つ一面的なゲイ・ステレオタイプの

押しつけ及び「やおい」表現物・少女まんがにおけるゲイ・ステレオタイプ表現への怒りに満ちた抗議にあったことが、十分認識されていなかったがために、佐藤さんと高松さんのやりとりがあんなにも擦れ違ってしまったのではないかと私には思われるのだ。

「ステレオタイプ」という言葉は、今回の錯綜した問題をいささかなりとも解きほぐす上で、役に立つキーワードになり得ると私は思う。

「こいつら、男同士の絡みを眺めて何がおもしろいだろうか?」(「CHOISIR」二〇号)と佐藤さんは憤慨しているが、当然のことながら、「やおい」たちは現実の男同士の性行為を覗き見しているのではない。自分たちの想像したゲイ・セックスのイメージを描き、かつ読んでいるのである。すなわち、これはあくまで「イメージの政治学」の問題であることを、ここでしっかりと確認しておきたい。

あまりにもワン・パターンの同性愛者像は、確かに巷

に溢れている。「美しい」「個性的」といった一見ブラスのイメージさえも、それが生身の人間の一面のみを誇張し固定化する役割を果たしていることは否定できない。「ステレオタイプには肯定的なものと否定的なものとはありますが、どちらもある面を誇張し、他の面は完全に認めないという点で共通しています。つまりステレオタイプは人間の多面性を無視し、否定します。例えば、「黒人はスポーツが得意」というステレオタイプは一種のほめ言葉と聞こえるかもしれませんが、その裏に否定的なステレオタイプ——「スポーツはうまいが……頭は悪い、怠け者——」などが密かに内在しています」（*1）

これはジョン・G・ラッセルの『日本人の黒人観』からの引用である。まんがや小説などの作品を有機的な全体として見ず、一部の描写のみを取り上げて「差別的」と断ずるなど、いろいろ問題の多い本ではあるが、要するに、表現の場であれ何であれ、無知に基づく決まりきったステレオタイプばかりが流通し再生産されている事実と、それが生み出す差別を告発しているのである。多様な黒人表現がある中で一部に昔ながらのステレオタイプが残存しているというならまだしも、ステレオタイプしか存在しないことこそが問題なのだ。（*2）

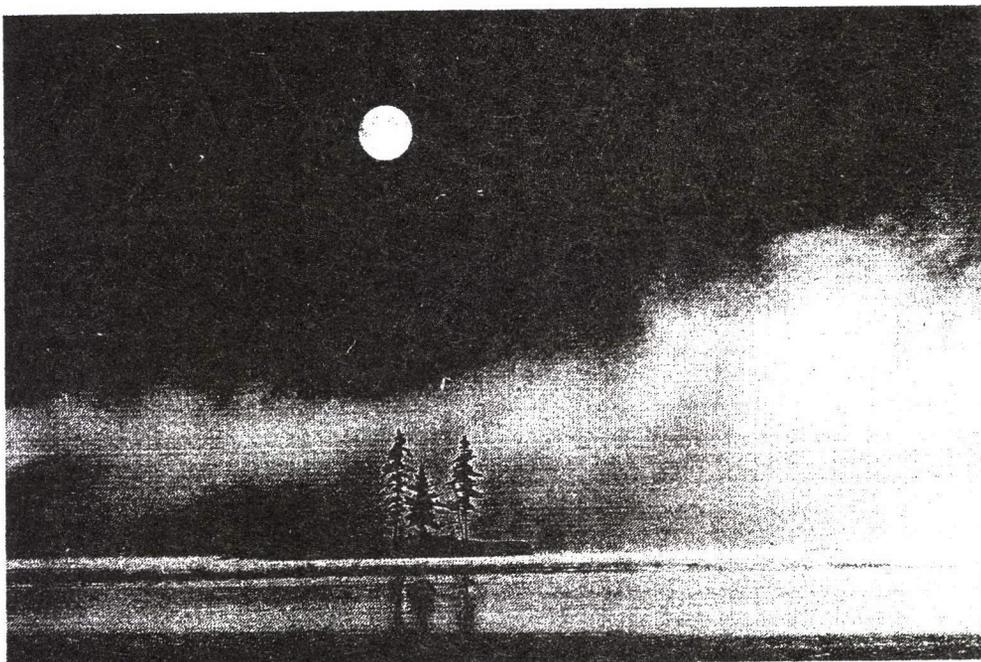
くだくだして説明を加えてしまったが、ゲイ・ステレオタイプ批判という文脈において、考えてみれば「やおい」ほど「究極の関係」ならぬ「究極のワン・パターン」はないわけで、佐藤さんの非難がまず「やおい」に集中したのも、もっともなことだ。大量のセックス・シーンだの悲劇的結末だのあくまで美しい男たちだの「型」「様式描写」の世界。「盆栽」とは言い得て妙だと思う。たとえ、「やおい」や一般の少女まんがの作者たちが、

手垢にまみれた「男一女」関係を避け、「男男」という記号を用いることによってこそ成し遂げ得る、人と人とのあり得べき新たな関係を模索しシミュレートしているのだとしても、それが常にステレオタイプの男性同性愛者イメージを繰り返すだけに留まるならば、やはりステレオタイプとして批判される余地はあると言える。ただし、その個人の中に巣くってしまったステレオタイプを、個人の罪としてのみ捉えず、時代や社会との大きな連関において捉えなければならぬことも、同時に言い添えておく。

そして「少女マンガにダイエットを」で佐藤さんが検証しているようにしているのも、まずはそのゲイ・ステレオタイプ表現に他ならないと、私は受け取っている。だから、「CHOISIR」二十七号で佐藤さんが、自ら訴えたい問題点として「ゲイに対する女の加害性」と「少女マンガの自閉化」の二点を挙げているのは、むしろ、誤解を招きやすい雑駁な表現なのではないだろうか（現に、同じ号で高松さんは、自分たちの加害性に目をつぶっているわけではないと反論し、「少女マンガ」と一括して「自閉化」云々と言われることに違和感を表明している）。それよりも、「少女まんがにおけるゲイ・ステレオタイプ表現とその加害（差別）性」と言ったほうがずっとすっきりするし、意図もうまく伝わると思われるのだが。

実際、ゲイ・ステレオタイプに囚われているのは、女一般ややおいだけではない。あくまでも「女の」加害性を証明することにこだわるわけは何なのだろう？

これまでにも、例えば欧米の白人女性が黒人を含むカラードの女性たちにとっては抑圧者・差別者の一員であり、日本人女性もまた、他のアジアの女性に対し同様の



立場にいることは、すでに広く言われ、認識されている事実だと思う。女が一方的な被害者ではなく加害者にもなり得るのは、何も目新しい発見ではない。今回の論争では、ゲイの男性が声をあげた点に意義があったのは確かである。

私個人としても、「見る」加害者／見られる「被害者」という、フェミニズムの内部でもすでに時代遅れとなっているような単純すぎる図式に固執するのは、決して佐藤さんのプラスにならないと思うのだ。

「見せる攻撃性」「見せつける快」についても女たちかの側から語られてきている。仮に対立図式が戦略として有効なことが明らかな場合でも、一〇〇%の被害者も一〇〇%の被害者もめったに存在しない以上、多くの人々は、ある関係では被害者、ある関係では加害者といったように、加害と被害の複雑な網目を生きているのだという現実に対する認識だけは失ってほしくない。「加害性」はすでに自明のこととして話を進めようではないか。そうしないと、いつまでも論議が深まらない。

その上で、行く行くは、問題のゲイ・ステレオタイプがなぜ作り出され、この社会でどのような機能を果たしてきたのか、その構造とイデオロギーを緻密に検証し、批判してほしい（フェミニズム批評が行っているように）と望むのは、現時点で佐藤さんにとってであれ、他の誰かにとってであれ、過大な期待というものかもしれない（*3）。どうやら、先走りし過ぎたようだ。

それに、佐藤さんが挙げている「少女マンガの自閉化（オヤジ化・オタク化）」というテーマは、私の言う「ゲイ・ステレオタイプ批判」の文脈に属するというより、少女まんがにおける「関係性」（私としては、このようなまやかしの言葉は極力、使いたくないのだが）の表現

(あるいはその喪失)を問おうとしているようである。いずれにせよ、この主題に関しては、今後のお手並み拝見といったところである。

一方、佐藤さんの初期の「ヤオイなんて死んでしまえばいい」発言に対し、高松さんたちはどんなふうに対応したか。

私の見るところ、「高松さんて人は真面目なんだなあ」と思うほど真摯に答えているように感じられる。口先で謝っても意味はない以上、そうした表現を好きだという事実を変えられない以上、「なぜ、どのような意味において、それを必要としてきたか、なぜ、今でもそうして表現を好むのか、そこに求めているのはいったい何か」ということに、私自身、徹底的にこだわりの探るというところから始めるほかはない」(「CHOISIR」二七号)と表明する高松さんの姿勢は、きわめて誠実なものであると思う。批判を受けて、認識は変わり得ても、セクシユアリティはおいそれと変えられるものではない。加害者の自覚によっても、欲望は消えないのだ。したがって、さしあたりできることは、自らのセクシユアリティそのものを突きつめていく作業しかない。

中島梓(栗本薫)も『コミュニケーション不全症候群』で実感のこもった分析を行っているが、内面に刷り込まれたウーマン・ヘイティングゆえに「自分を抹殺せざるを得ない自分に苦しみ、苦しみながら出口を模索しようとしている。自分は『異常』なのか、と悩み、だけど仕方がない、とあきらめ、でもこれでいいのかと問い続けている」(*4)やおい少女たちの心境は、現代社会との関連においても興味深いものだとと言える。

しかし、高松さんたちがどれほど誠実に自らのセクシ

ユアリティを掘り下げようと、それが彼女らにとってどんなに苦しく意義深い作業であろうと、根本的な問題は「そもそも佐藤さんは、やおいがやおいとなった理由や、やおいのヘテロセクシユアリティが抱える問題点などに関心があるのか?」ということにある。

もし佐藤さんの訴えたいことが、「やおい」にもっとも極端な形で象徴されるゲイ・ステレオタイプの批判にあるのだとしたら、それは高松さんひとりで背負い切れる問題ではない。高松さんは「やおい」一般ではなく、私という個人に向かって話をしてください」(「CHOISIR」二一号)と求めているけれど、問題はとうにそのようなレベルを超えているのではないか、と思うのは私だけであろうか。

また、佐藤さんの言葉を受けて、それまでの自分にとっての「梓」を見直そうとする高松さんの態度を評価しつつも、佐藤さんは、それは自分の聞きたかった返事への「あくまで書き出し」だと書いているが、上記のような高松さんの努力が長い時間を要する困難なものであることを考えれば、返答を求める佐藤さんの態度は、あまりに性急すぎる気がする。ゲイに対する「美の規範」をも含めたステレオタイプの押しつけは、高松さんひとりの努力でなくせるはずもない。プロセスはまだ始まったばかりなのだから。

今回の「やおい論争」を真に実りあるものにするためには、佐藤VS高松という個人的対話に終わらせないことが重要ではないだろうか。もちろん私は、「私に向かつて」と語った高松さんの誠意は、十分理解しているつもりである。それでも、やはり佐藤さんが提起している問題は、高松さんひとりに負わせるには荷が勝ち過ぎていると思えてならないのだ。むしろ今後は、より幅広い

論議を期待したい。ステレオタイプを脱した多種多様な女のイメージ、ゲイのイメージが、あたりまえのように市場に氾濫するのは、いったいいつになることやら？

最後に、本題と間接的に関連するメディアと受け手の関係ということに関して、アメリカのレズビアン・フェミニスト、ビディ・マーティンの言葉を引いておきたい。

「最近フェミニストによるメディア研究では受容する側の能動性が強調されているようです。つまり女性がいかかにメディアに反応しメディアを活用しているかを調査し、メディアが一律に抑圧的であり受け手は完全にだまされているという考え方は避けようとするわけです。例えばロマンス小説の読者やテレビの女性視聴者を対象とする調査では、多くの女性がメディアの与えるイメージやメッセージを想像以上に能動的に解釈・操作していることが明らかにされています。……メッセージをめぐるフェミニズム論争では、メディアの役割とは何であるのか、メディアが実際はどの程度支配的なのか、ということが争点となっています。メディアへのヘゲモニー論、完全支配論への反論として、一人一人の女性だけでなくサブ・カルチャーとしての女性たちが、メディアの扱うイメージや事件を自分たちの利益となるように読み替え、能動的に解釈しているのだ、という論があるのです」

(*5)

ここでは女性について言われているが、言うまでもなくゲイにも当て嵌まることであろう。「女の子にとっての」ファンタジーに満ちた表現物（おもに少女まんがとなろうが）を読んだせいで「迷子になるウブなゲイ少年」とやらを憐れむ前に、自分の頭で考えることを学ばせるべきではないだろうか。ゲイにとっての多様な情報が不

足している現状ならなおのこと、ひとりひとりにもものを見抜く眼と批判的判断力が求められているのだと思うし、いっそのこと自分から発信していくほうが有効だ（だから、佐藤さんは『KICK OUT』をやっているのだろうか）。そうして、遅々たる歩みの中で、少しずつ人々の意識が変わっていくことでしか、望ましい状況なんて手に入らないのだから。

なお、この文章は、「やおい論争」に対する私のあくまで個人的解釈ないし整理といった意味をもつものであるので、事実誤認などあったら、どうか指摘してください。批判、質問などは、遠慮なく市川まで。

〔註〕

*1 ジョン・G・ラッセル著『日本人の黒人観』新評論、一九九一、p.173

*2 手塚治虫作品などをめぐるいわゆる「黒人差別」表現問題も多くの問題を孕むものではあるが、ここでは触れないことにする。『COMIC BO X』一九九一、三・四月合併号 一三四頁以降、

「黒人差別を考える——識者／まんが家アンケート」を参照すると興味深い。

*3 グリゼルダ・ボロック／ロジカ・パーカー共著、萩原弘子訳『女・アート・イデオロギー』新水社、一九九二、を参照すると有益。

*4 中野冬美「女はすべてポルノグラフィイである」、『図書館を考える会通信』六六号、一九九二、掲載。

*5 『週間読書人』一九九三、四／一九九号掲載のビディ・マーティンへのインタビューより。



性的ファンタジーは誰のものか

高松久子

市川さんという、一面識もない読者の方から、今回の「やおい談義」をめぐる、非常に整理された文章が届いた。正直言って、ほっとしている。

今回の議論の見取り図としては、市川さんが整理したこと、だいたい言い当てていると思う。

「そもそも佐藤さんは、やおいがやおいとなった理由や、やおいのヘテロセクシュアリティが抱える問題点などに関心があるのか？」と彼女が反語で言っていることは、まったくその通り、と言うほかはない。彼にとっては「ゲイ・ステレオタイプ表現」批判の題材として「やおい」表現やその愛好者を問題にしたまでのことであって、それを享受する人間のことに興味も関心もないことは、確かにこの何回かの彼の文章で明らかとなっていることだと、私も思う。

その点からいけば、私が最初の三回ほどの文章で書き続けたきたことは、彼からみればまったく「的はずれ」であったこともまた自明のこと、議論は擦れ違うほかなかったろう。しかし、開き直るわけではないが、当初、彼の批判の矛先が「ゲイ・ステレオタイプ」批判だとわからなかった以上、あのセツティングで、あれ以外に私個人に何が言えたかといえば疑問だ。

ともかくも、市川さんの一文のおかげで、ようやくこの問題も開かれた議論が可能になったと言える。これは本当によかったと思う。これを機に多くの人たちがこの話題に参加して議論が進めば、私の「見当違い」も意味はあったというものだ。

と言いながらも、今回書くのは、市川さんの提起してくれた「ゲイ・ステレオタイプ批判としてのやおい論争」というテーマからは、かなりズレるものになる。それは、市川さんのテ-

マ設定に不服だったからとかそういうわけではないし、いずれ（氣力があれば）私もせっかくの「論争」に加わりたいとは思っている。しかし、その前に、これだけはどうしても言っておきたい。

『耽美小説・ゲイ文学ブックガイド』という本が白夜書房から出ている（*1）。日本とアメリカ・ヨーロッパのゲイ・レズビアン文学と、女性を書く「男同士の恋愛」物語（ここでは「耽美小説」という言い方がされている）のブックリストだ。ついで、いつものくせで買って読んでいたら、突然、私が「CH O I S I R」で書いた文章が引用されていて驚いた。

編者の一人である栗原知代さんの「概論Ⅰ 耽美小説とは何か」という文章の中に、「やおいに未来はあるか」という章がある。私の文章の引用はそのなかでされているのだけれど、前後を説明すると、こうだ。

栗原さんは、『J U N E』という女性向け「男同士の恋愛」物語ばかりを集めた雑誌で、長年「J U N E 文学ガイド」という連載をやっている人なのだが、ここで彼女は、「耽美小説」を「卒業」してしまった立場から、なぜ女性が男同士の恋愛小説を愛好しているのかという考察を行っている。

彼女は最初、その行為を無意識のフェミニズムであると考えていた、という。つまり、既成の「女らしさ」に自己同一化できない女性が、自分の姿——女であること——から逃避した先が、女が恋愛の主体として登場しない「耽美小説」なのだ、というわけだ。

「ところがそのとき、なぜ自分がゲイ小説に逃避していたか、その構造がぱっと見えたのである。その瞬間、わたしはまぎれもなく女性なんだから、女でいいんだ。こういう女のままで、生きていって恋愛する道を見つければいいんだ、と思った。それからというもの、あれほど好きだったゲイ小説やゲイに

対する興味が、嘘のように消えていった。文字通り、燃えつきってしまったのである。

たからわたしは、耽美小説のマニアたちは、そういう自分の心理に気付かない人々だと思っていた。ちゃんと自分が女であることを受け入れられれば、耽美小説への興味は無くなるものだ」（『耽美小説・ゲイ文学ブックガイド』p.333）

そこで、同じような経験をしながら、「なおもそういう小説を手放さない」例として、私の文章が出てくる。

「ここまで、きちんと自分の分析をしている頭のいいフェミニストの女性が、なぜ？ なぜ、やおい小説を必要とするの？」（同、p.333）

結論として、自分が「女制」というものに縛られていたことを自覚しながらもお、そういう小説を読み続けている私のような人間は、「現実の恋愛の『物語』に阻害されていること、愛されない自分というものを自覚したくないから」、決して手に入らない幻想の物語を必要とし、読み続けているのだ、と論じられている。

私の嗜好を誰がどのように論じようとも、私としては土足で勝手に私の中を踏み躪られたようでも不愉快だけれども、「まあ、勝手にしてください」と言うほかはない。ただ、彼女のこの文章を読んでいて、非常に危険だと思う点がいくつかある。

◆自分の経験を一般化すること◆

「CH O I S I R」二〇・二一号で書いたように、私が最初「やおい表現物」（『耽美小説など』）と言い換えてもいいが）にハマってしまったきっかけは、基本的には栗原さんとかかなり似ていることは認める。しかし、自分の経験がそうだからと言って、他人がみんなそうだとは言えない。実際、私は栗原さんと違い、「卒業」できなかったわけだし、そういう「理由」をとってらってもなお、そういう物語を好んで読む私を知っている。

私の周りには、「女であること」を自己肯定しながら「やおい表現物」を見たり書いたりしている人もたくさんいるし、現実の恋人との関係にすごく満足しながらも、それを手放さない人もいる。

そういう彼女たちに対して「あなた、本当は今の関係の中で愛されていないから、そういう表現に逃避しているのよ」と、他の誰かが言うことに、何の意味があるだろう？

こう書いていると、やっぱり、やおい批判の構図はフェミニズムのなかのポルノグラフィと女性との関係にすごく似ているんだと思う。つまり、「男性支配のイデオロギー」である「ポルノグラフィ」を好んで見たり、それで欲情したりする女性は「男性支配のイデオロギーを自分の中にとりこんでしまった、『かわいそう』な人である。しかし、自分がそうした『イデオロギー』を内面化していることに気づきさえすれば、簡単にそれを手放せるはずだ」、と。

こう主張する「フェミニスト」に、私はあらかじめ思い描かれた「理想的な性愛」というファンタジーの存在を感じる。しかし、その「理想的な性愛」が誰にとっても「理想的」かと言うと、必ずしもそうはならないし、まして、その「理由」が目に見える形で現実存在しない以上、いまある「ポルノグラフィ」を好む女性たちを、このような決めつけで断罪することに何の意味もない。

私は栗原さんの姿勢に、「かわいそうな耽美小説愛好者」を啓蒙し、更生させようという意図を強く感じる。その意図や姿勢が、いくらかつての自分を振り返り、二度と自分のような遠回りをしなくても済むように、という善意から出てきたものであっても、自分の経験を絶対化・普遍化した上で、「卒業すべきもの」として「耽美小説」を論じ、返す刀で「耽美小説愛読者」の「精神分析」を行うことは、けっこう失礼なことだという自覚をもって欲しいと思う。

そもそも、どんなものであれ、ひとつの「ファンタジー」を「卒業すべきもの」とするのは、ある前提——自己肯定できた女性がつべきファンタジーは、かくかくこういうものでなければならぬ——がなくてはできない話だということに、もう少し思いを馳せて欲しいと思う。

◆「逃避」のファンタジー◆
ところで、なぜ、「男同士の恋愛物語」を読むことを（女は）「卒業しなくてはならない」というふうに見えるのだろうか。

まず、すぐに思い浮かぶ理由は、自分が性的な主体としてアイデンティファイできない男同士の物語を消費するのは、現実の、自分が主体となる「恋愛」や「性愛」から逃避している、ということになるだろうか。つまり、自己肯定ができた女ならば、性的ファンタジーとして必要とするのは「女→男」か「女→女」という組み合わせであるはずで、それを敢えて「男→男」にこだわるのは現実の自分を引き受けられないからだ、結局、その表現は「本物の恋愛・性愛」の代償物なのだ、というのがその発想の裏にはある。

でも、いったい誰が、自分の所属する性——ジェンダー上の男か女か——と自分の「性的なファンタジー」を一致させなくてはならないと決めたのだろうか。仮に、「男→女」の物語でも、「女」である「私」は、常に女側にアイデンティファイする必要はなく、男の側にあることだってあるかもしれない。

決めるのは自分だ。代償だと考えるなら、もっと他の「ファンタジー」を探せばいいだけだし、そうでないなら、それでいいではないか。

こうした、ある性的ファンタジーを何らかの「代償物」として見なししていくという考え方は、「より（その人にとって）あり得べきファンタジー」を前提としながら、現実にある「性的

ファンタジー」に優劣をつけていることに他ならず、つきつめていくと、ある「性的ファンタジー」を抱くことに資格条件をつけるという発想に行き着く。つまり、女同士の物語をファンタジーとして消費していくのはレズビアンだけ、男同士の物語を消費するのはゲイだけ、というふうな。

◆「ファンタジー」は誰かの特権物か？◆
でも、わからないのは、こういう線引きをすることで、いたい誰にとって何の利益になるのか、だ。女であるということでもって、「男同士の恋愛」というファンタジーを私が抱くことを、「自立した女が抱くファンタジーは、もっと他にあるはずよ」と否定し、あつてはいけないことと断定しても、私の嗜好は変わったらしめないし、私がその「理想的なファンタジー」に魅かれたりすることにはつながらない。

「ファンタジー」は、それがどんなものであれ、特定の誰かの専有物ではないし、そう主張することに何の益もない。今やゲイ文学の古典的名作とされている『フロントランナー』（*2）は、女性の手によるひとつのファンタジーだけど、それを「女が描いたからナンセンスだ」とは言えまい。問題があるとすれば、誰が描くかではなくて、どういうふうを描くかではないと思うのだ。しかし、こう言うこともまた、「開き直り」と言われるのだろうか。

◆ステレオタイプとやおい表現◆
ここでようやく、「ゲイ・ステレオタイプとやおい表現物」という、市川さんの提起した問題にたどりつく。

「ゲイ・ステレオタイプイメーজ」とは何か、それがどの程度、どういうふうに通流しているか、といった問題については、今回触れるにはあまりに大きすぎるテーマなので、いずれ改め、ということにしたい。だから、ここでは「ステレオタイプ」

をどうやって変えていくかという、戦略の問題だけに限ってみたい。

私は、性にかかわるどんな表現物であっても、ステレオタイプになるのは、ある程度やむを得ないと思っている。もちろん多様な女性のイメージ、ゲイ・レズビアン女性のイメージがつくられていくことはすばらしいことだし、目標はそこにしかないと思う。しかし、その目標のために、今あるイメージをステレオタイプとして断罪することのみに終始するのであれば、それは百害あって一利なし、と言わざるを得ない。

ステレオタイプは、ひとつしかない、あるいはオプシオンが少なすぎるから問題なのであって、そのイメージ自体が問題だとは必ずしも言えないのではない。だから、そのステレオタイプを崩す戦略は、ステレオタイプそのものを拒否することではなく、そこにもっと多様なイメージを付け加えていき、その結果、ステレオタイプが形骸化すること以外にないのだ、と私は思う。

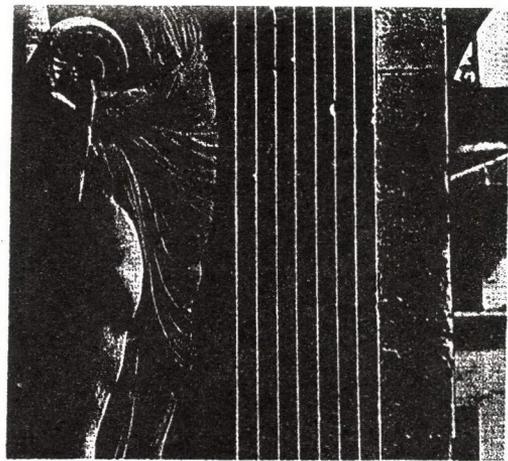
ステレオタイプを突き崩す多様なイメージは、何もないところからいきなり現れてくるものではない。むしろ、ステレオタイプが少しずつ変化するなかから、その姿を現してくるのではない。市川さんの言うように、仮にやおいが「究極のワン・パターン」だとしても、たくさんの「ワン・パターン」の中から現れる「ずれ」こそ可能性があるのだと、私は思うのだ。そういう私の姿勢が「あまりにお気楽だ」と批判するのは、おそらく簡単だろうとは思いますが、その一点だけは、私は決して譲るつもりはない。

*1 『耽美小説・ゲイ文学ブックガイド』

柿沼瑛子・栗原知代編著／白夜書房

*2 『フロント・ランナー』

パトリシア・ネル・ウォーレン著／第三書館



少女マンガにダイエットを 《私設番外編》

強姦された女

レスビアン

真愉



先日、ずうっと待ちわびていた秋里和国の『一〇回目の十戒』がコミックス化された。なんたって私の少女マンガオタク道の大先輩（と言ったら怒られるかもしれないけど）白藤花夜子サマが、「最近読んだレスビアンモノの少女漫画のヒットよ」とおっしゃっていたシロモノ、こりゃあもう、買うしかないでしょう！……っと思っただらば、これが。

超サイニター……。…一体なんなの、これ？？？ ねえ、花夜子おねえさま、どうしてこれがヒットなの？ わからないわ、理解に苦しんでしまったわ。それとも、これにはだまし絵的なカラクリがあって、ヘテロが読むと超名作にでも変わるのかしら？ レズビアン一人人として、私なんか呆然としてしまうようなイミのなさだとおもうんだけど。

語らせてもらえば一歳の冬、初めて手にした手塚治虫以外のマンガが、女子校イチャイチャモノだった運命のあの日以来、一〇年近くも少女マンガ道を極めてきた（ちよっとばかりヤオイに寄り道

してしまったこともあったけど。この私。そりゃあ、数々のレスビアン（もどき）少女マンガで心と体を幾晩うるおわせていたいたか知れないわよ、でもね。いいかげん、恩知らずを承知で、叫ばせていただきたいわよ、ためーら、一体なにが言いたいたいんだよ、このレスビアンもどきで！って。

だいたいね、アリエス、ベルばら（注1）の昔から、少女マンガって、文字通り、絵に描いたようなワンパターンでしか女同士の恋愛って描いてないじゃない？（注2）

一〇年前のなら、「しかたのないコね」であきらめて楽しんでやうけど、それにもいいかげん食傷だわ。そのうえ、このゲイ・ブームメント（注3）のまっただなかでさえ（だからこそ、か）、こんなステロタイプな、くっだらなのが堂々と出版されるとくりゃ、もう。「こんなあからさまな話題作りのためのレスゲイなら、もはやめてくんない？ 私は、全ッ然かまわなくてよッ」くらい、言っ

てやりたくもなるってもんよ。

個人的な趣味はあるだろうけど、言わせてもらえば、秋里って昔から、話題になる素材のツカミ(だけ)は妙にうまい作家だったわよね。読者のドギモを抜くすさまじい精神的ゴ都合主義と、前後にまったく脈絡なく消えるエタイの知れない設定は、なにやらつかみどころのない魅力(笑)を漂わせていたし。

あ、そういえば、そのイミじャ、この『十戒』って、彼女の持ち味をフルに出しきった大傑作ね。なにしろ、主人公の女二人のキモチの動きがまるで読めない。それが、ページめくったらいきなりベッドシーンだもの、「は？(これってポルノだったかしら)」って感じ。だいたい、キャラクターが全然、可愛くなくて(いつからこんなに秋里って絵が下手になったの?)、憎めない小悪魔的な美少女“のつもりらしいキャラクターが、ただの“憎々しい、顔がいいだけのインラン”だし。こういうのを、“駄作”って言うんじゃない? アラスジを書くのもうっとおしいから、めでたく割愛させていたたくとするけど、もう私、このサクヒンについてはなにも言うことはないわ。女王様ゆずりの「地獄へお行き!」の一言で、すべてカタがついてしまうもの。

でもね、ここが秋里マンガの侮れないところなんだけど、この話も、ちゃあんとレズビアン少女漫画の描き方パターンってやつをおさえてるのよね。私の長年の資料研究の成果から述べさせて頂くと、それはこういう条件なわけ。

1. “レズ”は男装の麗人か、小悪魔的な、なぐりに考えてんのかわからぬ美少女(美女)でなくてはならない。
2. “レズ”はレズとなった原因として不幸な過去、または辛い現実がなくてはならない。
3. “レズ”は必ず自分から主人公の少女に手を出さねばならない。おおむねこの主人公の方にも共通する暗い過去があったり、知ってしまった相手の過去にふかく同情してしまったりするので、

このキズのなめあいを拒むことは少なく、それを“愛”だと錯覚して“許して”しまう。

4. “レズ”にハッピーエンドはない(きっぱり)。

以上。ちなみにこれに、

5. “レズ”は拒まれても傷つかない(あまつさえ「ふふっ」とか婉然と微笑んでしまったりする)。

6. “レズ”はセックスが大好きである(当然、やるほう)。というが入ると、話がいきなりレディースコミックに突入してしまうので、今回は省略させてもらうとして、さて。

だいたいね、男性漫画の女がみーんな“聖母”か“娼婦”でもちっとも関係ないと思ってる女や、「えー、同性愛とかって異常だけどお、ハンサムか美少年でー、毛深くなんかもちろんなくてー、そういうのなら許してもいいな♡」とか平気で言ってしまう“処女”なんかに(この台詞はギャグや誇張ではない。現実には私は「コバルト文庫でこういう文章を読んで愕然としたことがあるのだ。その少女小説には、さらにつけくわえて、「でも、その場合、二人のラブシーンを見学させてくれるって条件付きよ。でなきや許ささない」なんて、ドッカーンな台詞が続いたりするのだから、すごすぎる)、「てめー、なんで“レズ”つつたら“オスカル様”なんだよっ、想像力の回線ぶち切れでんじやねーのか?」なんて言ったって、わかるとは誰も思っていないわ。同じ理由で、「同性を選ぶなんて何か理由があるはずだ、なけりゃ納得できない、許せない」ってバカに、「あんた、女に強姦されたから男が好きなんかよッ」と言い返してやるほど、思いやりもないし。

だけど、なにより許せないのは、そういうクソバカな女たちをレズビアンが脱がせて、やってやんなきゃならないってことよ。どこ

のレズビアンが男にも相手にされないような、内気で、要するにネクラな女の子をわざわざ強姦してやるっての、冗談じゃないわ。こっちにだって趣味くらいあるわよ、勝手に「レズ」「女とやりたい女」にすりかえて、妄想しないで頂きたいわ（普段から「オトコ」「女とやりたいイキモノ」にされてる男性諸氏のこと、ご愁傷様、と思っております）。

そうよ、男装の麗人はかっこいいわよ、性悪美少女は素敵だわ。だけと、そのうつくしい人たちが、指の一本も動かさずに王子様を待ってる女に惚れてやるもんですか。こんなの、去勢されるよりなお悪い、メディアによるレズビアンの強姦女奴よ。

ああ、なかには、幾多の名作もあったとはいえ、ヘテロの妄想の産物のレズビアンもどきに、幼い心を痛めていた自分がアホに思えてくるわ。こんなどーしよもない『十戒』ですら、「読んで？ 良かったわね」なんて言ってるレズビアンの友達もいたりするんだから、レズビアンの文化状況って、不遇すぎね。それどころか、健気にも「女を愛する女はタチでなくてはならない」を信じて、一生懸命、恋する彼女のためにタチになろうとしてる一〇代の子なんかもいたりするんだから。

ねえ、この状況を犯罪だって言って、何かいけない？ 結局のところ、そういう娘たちが、ヘテロの性欲処理のために都合よくベッドに引き入れられてただけだったってわかったところで、自分に絶望するか、逃避する以外、なんにも逃げ道がないんだもの。（一〇代の女の子に「メディアの嘘を見破れないあんたが悪いのよ」、なんて残酷な台詞、私にはとても吐けないわ。）

そう、さらに少女漫画のレズビアンときたら、未来までもを奪いとられてるのよね。そりゃあ、『アラベスク』とか『白い部屋の人』とか『摩耶の葬列』とかみたいに（注4）、レズビアン本人が自殺して、もともとヘテロだった少女が泣き崩れて終わる（さて、この少女たちが、この先も女と恋をしたと思うか？ ……否、だよな。「私は「女」が好きだったんじ

やない。「あの人」が好きだったんだもの」なんて言い訳して、男と結婚していくに決まってるのよ。これが、「女同士に興味ある」とか「女同士とかも、私ぜんぜん抵抗ないし」とか言ってるヘテロの本音、逃げ道なのよね）ってストーリーは減ってるわよ。でも、それは少女漫画全体の傾向が、「死」なんて高尚すぎるテーマを扱えなくなったってだけのこと。レズビアンに「若いときのまま死ぬのが美学」願望から、「今が二人で楽しいからいいじゃない」的快樂主義を持たせかえて、ベツドシーンでのラストシーン。これをハッピーエンドだと勘違いするほど、現実のレズビアンは非現実的じゃないわ。

死を選ぶほど現実を悲観しない（現実を直視しない）かわりに、未来を生き抜く精神力なんてかけらも持ちあわせないレズビアンもどきキャラクターの末路。所詮は「男と恋愛するのが女の自然（『幸せ』未来）」な主人公の少女が、一緒に戦ってくれるはずがないじゃない。女と寝るなんてタブーを、平然とやらかそうという勇氣（？）はあっても、親兄弟、親戚、職場——たとえば部屋を一步出たら、そこから戦場になりうる現実——に、自殺せず立ちむかっていく力なんて存在しない。男の背中にかばってもらって美しく微笑んでいるのが「幸せ」なヘテロ女を背中に戦えるほど、レズビアンの背中は大きくないわよ。嘘っぱちな現在形だけのハッピーエンドで、へらへら喜んでいられるほど、私は暢気じゃないし、そういう女を許してやれるほど、レズビアンって女に優しいわね。

さて、フェミニストじゃない、で思い出したから、最後にもうひとつだけ言わせてもらおうね。

この、どうしようもなくマニュアル通りな「一〇回目の十戒」だけど、最後だけはちょっとこのワンパターンから外れていて、これが少しばかりこの話のムードを変えているのでとりあげてみたいわ。

「やだ もうこんな時間！ 亜紀彦さんが帰ってくるー（ベッド

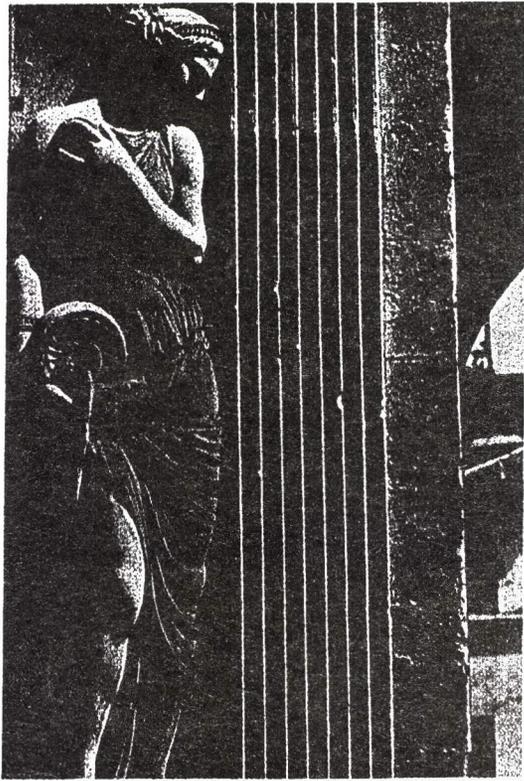
から身を起こす)ゴハンつくらなきゃ」(あろうことかこの女、
恋人の兄貴の妻なのだ)

「手伝うよ」

「いいわよ」(微笑む)

たしか花夜子おねえさまは、ここをとって「良い」と褒めていた
ような気がするんだけど(違ったらごめんなさい)。確かにこのく
だりは、フェミニズム的対等幻想(若しくは対等憧憬)を
納得させてくれそうよね。だけど、これが本当にレズビアン¹の現実
を表していると思う?

「男なんてみーんないなくなってしまうばい だけどいなくな



らないから 女は男を利用するのよ セクシーを売り物にして」な
んて台詞を吐く女(これがレズビアンだとも言うのか?)と、恋
人と自分の兄との結婚を黙認し、あまつさえその妻となった女と平
然と寝ることのできる女(こいつが男装の麗人。こいつがレズビア
ンなのか???)のキャンケイを、この台詞だけで「女同士ってやっ
ぱり対等なのね」とか、「レズビアン²の現実を描いているのね」な
んて短絡できてしまうのは、なにかと思うわ。

どうもレズビアン³って、フェミニストの方々から、フェミニズム
の最大の理解者、ないしは最大の実行者と見られているふしがあっ
て、わりと迷惑だわ。ただでさえ「レズビアン⁴が口紅をつけるなん
て!」口紅がどういいうイミをもってるかを知っているの!」とか、
「女同士なのに男女の型をまねるなんて、自分の歪みを直視してい
ない証拠よ!」とか、堂々と説教するレズビアン⁵・フェミニストの
おねえさまがただけでうんざりしてるんだから。どうか、あんまり
期待に瞳をぎらぎらひからせて見つめないで下さいませね。ヘテロ
がどんなふうに幻想を膨らませても、それぞれのレズビアン⁶がどん
なに自分の正当性を主張しても、レズビアン⁷の在り方が多様である
ことは変えようのない事実なんだからさ。それがお互いの精神衛生
のためだと思っただけだね。皆さん、いかがなものでしょうか?

注1 『アリエスの乙女たち』里中真智子／講談社

注2 『ベルサイユのばら』池田理代子／集英社

注3 『ゴロの悦しみ』(ヴィスタリア・シリーズ)、佐藤史生や、
中期以降の山岸涼子の作品など、例外は多々あるけどね。

注4 『ゲイ・ムーブメント』の誤植ではない。二本木由実氏の造
語。

注5 『アラベスク・第2部』山岸涼子／角川書店(全集)

注6 『白い部屋の二人』山岸涼子／角川書店(全集)

注7 『摩耶の葬列』一条ゆかり／集英社(全集)



かつてにシネマ
野性の夜に
柳田亮子

はっきり言って、監督・主演のシリル・コラールがエイズに倒れ、この作品がその遺作だという話を聞いていなければ、「なんて通俗的にエイズを扱う映画なんだろう」と憤慨しつつ、この映像を見ていたと思う。

監督自身、エイズの物語ではなく、ラヴストーリーを描きたかったと言っているのを考えると、この「野性の夜に」をエイズの問題作としてとらえるのは、ちょっと違っているように思う。この映画に描かれているのは、典型的なフランス映画のロマンスではない（フランス映画ファンの人がいたらゴメンナサイ）。映画「野性の夜に」は、エイズに感染したバイセクシャルの男ジャンと、C Fのオーディションで彼と出会ったローラという少女、そしてジャンの友人サミーの三人の人間を中心に描かれている。

三〇歳のジャンはカメラマン。自分がエイズ・キャリアであることに気づきながらも、そのことには触れず、サミーをベッドに誘い、また、はっきりとエイズ・キャリアであることがわかってからも、そのことを告げられないままにローラと（コンドームなしで）セックスする。

シリル・コラールはこれを一九八六年の設定として描いているため、エイズの告白が容易でなかった時代背景を投影していると言うが、映画を通して見えたの

は、その時代性ではなく、登場人物たちの間にいかに人間関係が築けていないかということだった。「ロングタイム・コンパニオン」で、エイズという問題がどのように扱われていたかを考えると、この映画のなかでの「エイズ」は、ジャンの恋愛・セックスのスパイス、人間関係をつくれぬ言い訳にしか見えなくなってくる。

ついにジャンがエイズ・キャリアであることを告白したとき、「どうして隠していたの！」と泣き叫ぶローラは、「エイズウイルスが自分の一部と思えない」というジャンの葛藤を聞くと、そのあとのセックスでコンドームを拒否してしまふ。別の場面では、サミーもジャンに愛情を伝えようとしてコンドームなしでセックスしようとする。この映画の中で、ジャンへの愛はコンドームなしでセックスしようとするかどうかによって表されている。

このあたりの、エイズへの対応と人間関係のいい加減さには呆れてしまう。たとえ八六年の設定としても、ひどすぎる。ストーリーの流れから見ても、ローラが愛ゆえにコンドームを拒否したのとは見えない。相手と自分も運命をともしようという思い込みは、自分の運命を相手のせいにする責任のなすり合いではない。しかも、ジャンも素直にコンドーム

ムなしでセックスしてしまう。それはロ
マンスという以前に、ジャンとローラの
年齢差を考えれば、犯罪的ですらある。

ローラはジャンとの関係が悪化してい
くなかで神経衰弱を起こし、自分のエイ
ズ検査が陽性だったと思い込むのだが、
これも実は陰性で、エイズに感染してい
なかったという落ちがついている。あれ
だけコンドームなしでセックスしてて、
本当に感染しないのだろうか？と、私は
悩んでしまった。そういうこともあると
思うけれど、この映画がエイズをリアリ
スティックに描いているという数々の映
画評は、いったい何だったのだろうか？
そして、このローラの無謀とも言える
愛情表現（独占欲）を受け入れつつも、
結局、ジャンは男との愛撫やセックスを
必要とする。ローラはそれを我慢できな
い。パルティでサミーと愛撫し合うジャ
ンを目にして、ローラはついに怒りを爆
発させる。距離を置くためにニースに行

くというローラに、ジャンは自分の行為
はエイズへの恐怖ゆえだと言う。冷たく
突き放そうとするローラ。「一八の小姐
にこの恐怖がわかるものか」と、男の愛
撫を求めるジャン。

ここらへん（ここ以外でも）、ジャン
が精神的に女を愛していないことは、つ
くづくよくわかる。男を愛しているとも
言えないけれど、心理的には女よりは男
への対応のほうがマシだ。しかし、セー
ヌ河の橋の下で、エイズ・キャリアであ
るにもかかわらず見知らぬ男たちと愛撫
をし合うジャンは、そこに集うゲイたち
も対等な人間として見ていない。そこか
ら垣間見えるのは、自分をゲイと認める
ことへの恐怖だ。本当は男の方が好きな
のに、それが認められない（サミーとあ
る程度まで関係を築くことができたの
は、サミーがストレートの男ゆえのよう
にも思える）。

ローラが「私だけがあなたを幸せにで

きる！」とヘテロ女の思い込み剥き出し
で叫ぶ留守番電話のテープを聞きながら、
ジャンは逃げるように男たちの愛撫を求
め、橋の下で自虐的に男たちと絡み合う。
それはヘテロ女の「女との愛があなたを
救う」という思い込みに「NO」を言え
ないジャンの心理の表れである。そんな
ジャンに対し、「エイズに感染したこと
で、本当に人を愛することを知ったのね」
とジャンの母親に言わせてしまうところ
など、その人間の描き方の甘さに思わず
溜息が出る。

シリル・コラルルの自伝的映画である
ことから、実際、彼にとつて人間関係と
はこういうものだったのかもしれない。
それを思うと、この映画のもつ「リアリ
ティ」に暗澹としてしまう。信じられる
ものが誰もいないという「リアリティ」
が彼の愛の物語ならば、彼にとつて人間
関係とは何だったのだろうか。それだけ
が、重く思えた映画だった。

七月一日。念願のホリー・コール・トリオのコンサート♥。昨年の来日、今回の本公演と、チケットを取れずに泣いていた矢先に、追加公演の案内を新聞に見つけた時は狂喜乱舞。まだ、行けると決まったわけでもないのに。だけど、土曜日の午前10時からリダイヤル・ボタンを三〇分間、押し続けた苦勞は報われたのだった。

「天王州アイル」なんて言っても、できたことは知ってたし、トレンディ・ドラマの舞台になったのもチェックしてたけど、行くのは初めて。目指すは、その天王州

ごきげんナイト ホリー・コール・トリオの巻 色川奈緒

アイルにあるアトスフィアというコンサート・ホールなんだけど。ああ、私ってば、ライヴハウスの「パンクで縦ノリ」なら知ってんだけど、ジャズコンサートなんて生まれて初めてだったし、おまけにアトスフィアがどこにあるのかわかってないくせに、事前に調べているというマメな体質が「忘却の彼方」しちゃったりして、当日になって緊張するというはめに。

だいたい、浜松町からモノレールなんて、飛行機に乗る国内旅行か、流通センターのパーゲン（そんなものに行ったことのある私）間違えないでね、母の買い物に

つき合っただけよっ）以外に、めったに乗るものじゃないのにい。なんだってまた、こんなとこ選んだのよっ。例によって混雑しているモノレールの浜松町駅。旅行鞆を下げた人も確かにいるが、何かが違う。何事？ 連れが一言、「あ、今日はトゥインクル・レースの日だ」。ゲゲーッ。そう言われて見れば、耳の上に鉛筆はさんだオッチャンがいっぱい。ボディコン・スーツのお姉ちゃんも、競馬新聞とニラメッコ。ううーむ。トゥインクル・レースなんて言ったって、競馬は競馬じゃないのお。私のジャジーでスウィートな夜は、どこ？

しかし、メグズに浜松町から一駅しっかり座り（向かいのオジチャンは手には競馬新聞、耳には鉛筆、口には禁煙パイポだった）、着いたらガックリ。迷子になって遅れてしまうかもしれない、なんて焦る必要はなかったのだ。だって、天王州アイル駅ってのがドーンとあって、改札出てすぐデッカい地図があって、アトスフィアってゴシックで書いてあったんだもん。街でもできあがってるのかと思ったら大間違いで、運河沿いに取って付けたようなビルが建ってるだけだったのよう。

ホールは、ちょっと成金趣味のおぼさまが好きそうな感じだった。ジュースもビールも高くて、だから飲まなかった（セ、セコイ）。協賛の武田薬品の社員とおぼしきスーツ姿のニイちゃん三人組が私より前に座っていたのが気にいらなかった。私にはチケットをおねだりできるような知り合いが武田薬品にいないだけ。クソオ。

ライトが落とされ、張り詰めた空気の中で、コンサートが始まった。キャキヤー、夜な夜なCDを堪能し、動いているところを見たいとビデオまで買ってしまったホリー・コールが、歌っているう、動いているう。片言の

日本語までしゃべったりして、笑ったりなんかもしているじゃないのっ。ミーハーな興奮の増嶋。

ピアノとベース、そしてボーカルのシンブルな構成は、何とも言えない緊張感。だけどとても心地よい。ピアノ、ベースともにメチャウマだけど、ホリー・コールの音量、音域、そして、あの独特の歌唱法ったら。低音から高音へと昇りつめる歌い方は、心地よさと透明感と、人生の深みみたいなものまで感じさせてくれちゃうのだ。

CDだけでも年齢不詳だったのに、実際にコンサートを聴きに行っても、やっぱり二九歳とは思えない。透き通った高いボーカルでささやくような歌い方を披露するかと思えば、辛酸舐め尽くした年配女性みたいなボーカルを聴かせてくれたりする。

私が彼女を知ったのは、CDショップでたまたま見つけた「コーリング・ユー」を購入したのが最初だったけれど、その後の「ガール・トーク」、このほど発売された「ドント・スモーク・イン・ベッド」と、どれも、お休み前には欠かせないものとなっている。

誰もが知っているスタンダードナンバーを、自分なりの解釈で新しい色に染めている彼女だけれど、私にとつては、声と歌唱法が気に入った以上のものがある。それはね、女の子の味方だったことだよ。「ガール・トーク」については、女を馬鹿にした歌を歌うこと自体がパロディだと語っているし、チャップリンの名曲「スマイル」についても、女は子どもころから女であるという理由だけでいつも微笑んでいなさいと言われて育つことへの反抗心をこめて料理したものだ、と語っているのさ。かっこいいっ。

彼女のCDは昨年の「第7回ゴールドディスク大賞」(ジャズ部門で9万枚の売上げ)、彼女自身も「洋楽グ

ランプリ・ニュー・アーティスト賞/ジャズ部門」に輝いた。それについて、「私が付加したりツイストしたりする解釈を、多分に男性との平等ということでは苦勞しているように見える日本の女性たちがおもしろがってくれたんだと思っている」。まあ、ホリーったら。少なくとも私はそうよ。

さて、こんなことを書くとき堅物のフェミニストだと誤解する人もいるかもしれないけれど、ステージ上の彼女は、とてもキュートでささくで、だけど本当に歌が好きなんだということがヒシヒシと伝わってきて、で、プロ意識ももちろんちゃんとあつて、だけどそれをひけらかさないという、とても素敵な女性だった。とにかく、よいの♡ まだ聴いたことのない人は、ぜひ一度。

そんなこんなで、ウットリしながら天王州アイル駅へ。当初の予定では、ビルの中のレストランでお食事でも、なんて思ってたんだけど、どうヒキ目に見ても「都会のシングル・ライフを楽しむ大人」が行くような所じゃなかったから、やめたわ。雑誌片手に「ここだ、ここおノリのヤツしか行かないとこだね、あれは。

そして帰日も競馬(あ、トゥインクル・レースだったかしらね)の終わった時間にぶつかり、またしてもオツチャンたちとギユウギユウ詰めモノレールに乗って帰った。クスン。なんて現実的なの。ああ、私のジャジーでスウィートな夜がっ。

だけど、ギユウギユウのモノレールや競馬のオツチャンなんかには負けないくらい、私ってば現実主義だった。だって、「こんな日はやっぱり、ワインとチーズよねえ」って言いながら、家の近所の居酒屋でご飯食べたんだもん。私のジャジーでスウィートな夜って、いったい……。

往復書簡が突如、途切れてしまったことについてのおわび

掛札悠子



私、掛札悠子と二本木由実さんの往復書簡の掲載が突然、途切れてしまったことに関し、何人かの方から「なぜ？」というお声があったとのこと。その件について、理由を説明し、おわびをしたいと思います。

第1の理由、主たる理由は、昨年九月末以降、私がレズビアンとバイセクシュアルの女性を対象にしたミニコミ「LABRYS」の創刊のため、自由になる時間の大部分をとられたことにあります。むろん、「CHOISIR」を軽んじていたわけではありませんが、「LABRYS」に関し、昨年一〇月の一カ月間で数百通の問い合わせをいただいた中、「CHOISIR」に費やす余裕がまったくなくなり、私の返信を書くことができなくなってしまったのです。

第2の理由、これは副次的な理由かと思いますが、創刊当時から「LABRYS」製作に二本木さんもかかわっていただいていることと、その他の物理的な理由で、私と彼女の間に書簡の前提条件としてあった「距離」がかなりの程度、なくなってしまったことです。その距離の縮まり方による影響が、おそらくは、「内輪ウケの内容」といった批判やご意見が後半になって聞かれたことの原因ともなっているのではないかと思います。

いずれにせよ、非常に中途半端な形で、「連載」のはずだったものを終わらせてしまっておめんなさい。今の時点で、往復書簡を再開・継続する気持ちの余裕も、実際の時間も私にはないのです。

編集後記

- ◆前号でお知らせした特集は、あいにく延期とさせていただきました。お寄せいただいた分については掲載させていただきましたが、率直に言って原稿が集まらなかったのです。アンケートにご協力くださった皆様、ありがとうございました。そして、ごめんなさいです。
- ◆お詫びです。前号は、誤植が目立って恥ずかしい限りです。申し訳ありません。
訂正：p. 6下段 後ろから9行目「いや、楽しくないけど、もうひとつの回路として」
→「いや、楽しくない、とか（笑）」。
p. 8下段 4行目「被害者っていうのは、『正義』とトルめる」→「ツルめる」
- ◆さてさて、編集部としても予想外の展開で「やおい論争」の特集のようになった今号、いかがでしたでしょうか？
- ◆真愉さんの投稿は、今までの「論争」の流れから外れていると思う方もいらっしゃるかもしれませんが、これまでの佐藤さんの言いたかった（と思われる）ことが、よりわかりやすいものになったと判断し、掲載させていただきました。
まあ、「怒りの対象」が、力量不足の漫画家なのか、肯定的な評価を下した漫画評論家なのか、「いいよね」と言っている友人なのか、つくりものと現実を履き違えているとしか思えない漫画愛好家なのか、はたまた、強制異性愛というイデオロギーなのかってあたりが、問題提起する側としてもゴツチャというか、テンコ盛りになっちゃってますが、「表現物が同性愛および同性愛者に対する偏見を助長し再生産する」という問題をどう考えるか、むずかしいところです。
- ◆「やおい論争」に関しては、今までのところ「よくわからなかった」という読者の方も多いでしょう。一見、（やおい）漫画と同性愛という、そのギョーカイを知らない人にはわかりづらい問題に端を発していますが、セクシュアリティにおけるマジョリティとマイノリティ、イズムと個々の女・男、ファンタジーと現実の境界線など、すべての人に関係する、幅広く奥深い問題だと思えます。
- ◆ヒーコラゼイゼイ言いながらも続いてきた「やおい論争」も、始まってからもう1年。いよいよおもしろい展開が期待できそうです。ぜひ、ご意見・ご感想をお寄せください。「論争なんてムズカシそう」なんて言わないで、アンケート用紙に簡単な感想を書いてくださっても嬉しいです。
- ◆次号の特集は「仕事と私」（仮題）を予定しています。今の仕事を選んだ理由（基準にしたこと）、会社とプライベートの距離の置き方、仕事に対する思い入れ、希望と現実のギャップ、職場での人間関係、転職体験記、などなど、仕事に関することなら何でもOKです。アンケートにご協力ください。
- ◆その他、映画や本の感想、最近、疑問に感じていること・怒っていること、嬉しかったこと・悲しかったこと、テーマは問いません。字数も自由です（あまり多いものは別途ご相談）。投稿をお待ちしています。

（色川奈緒）

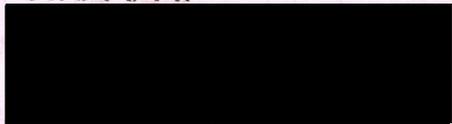
その試みの幸福は、そのまゝ試みられたりも期待するのみ、お果群の試みは試みながら
、その試みは試みながら試みながら試みながら試みながら試みながら試みながら試みながら
、その試みは試みながら試みながら試みながら試みながら試みながら試みながら試みながら

、その試みは試みながら試みながら試みながら試みながら試みながら試みながら試みながら
、その試みは試みながら試みながら試みながら試みながら試みながら試みながら試みながら
、その試みは試みながら試みながら試みながら試みながら試みながら試みながら試みながら

、その試みは試みながら試みながら試みながら試みながら試みながら試みながら試みながら
、その試みは試みながら試みながら試みながら試みながら試みながら試みながら試みながら
、その試みは試みながら試みながら試みながら試みながら試みながら試みながら試みながら

、その試みは試みながら試みながら試みながら試みながら試みながら試みながら試みながら
、その試みは試みながら試みながら試みながら試みながら試みながら試みながら試みながら
、その試みは試みながら試みながら試みながら試みながら試みながら試みながら試みながら

、その試みは試みながら試みながら試みながら試みながら試みながら試みながら試みながら
、その試みは試みながら試みながら試みながら試みながら試みながら試みながら試みながら
、その試みは試みながら試みながら試みながら試みながら試みながら試みながら試みながら

CHOISIR 29号	
編集・発行	CHOISIR
郵便振替	
	(名義・ショワジュール)
発行年月	1993. JULY
定 価	300円
年間購読代	3000円 (含送料+DM)